

特集・足立明教授追悼

研究ノート

「開発言説」再考

—日本の戦後復興から考える—

富山一郎*

Rethinking ‘Development Discourse’ : From the Perspective of Japan’s Revival after WW II

TOMIYAMA Ichiro*

The purpose of this paper is to reconsider the discourse which has emerged in the course of development. In 1994 a workshop on ‘Development and Orientalism’ was held in Kyoto. The workshop was organized by Adachi Akira to discuss the political meaning of development discourse in relationship to colonialism, orientalism and capitalism. In this paper I would like to address points that emerged from the workshop. The vital point among them is how we should analyze the process of resistance against the discourse and the internalization of the discourse. To consider this point I would like to take as reference the process of Japan’s revival after WW II. Using the revival as the term related to development, we could get the situation of destruction and ruin which has been concealed in the course of development. In other words, development discourse presumes the destruction as the beginning which had been externalized as past and others. However I would like to appropriate the beginning theoretically in order to criticize development discourse in this paper.

1. 開 発 言 説

開発，あるいは振興とよばれる政策の前提には，その政策対象とされた当該社会に対して，貧困や格差といった何かしらの解決しなければならない課題や，危機や災害といった復興しなければならない破局的状況が想定されている。いわばこうした解決し，乗り越えなければなら

* 同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科，Graduate School of Global Studies, Doshisha University
2013年11月18日受付，2013年12月3日受理

ない課題が、開発や復興の政策の前提として設定されているのであり、あえていえばそれは、解決されることが予定されている課題でもあるだろう。課題の設定は、すでに解決の道筋の設定でもあるのだ。またこうした課題は、多くの場合数値化され、開発の効果もまた、数値予測として計画されることになる。たとえば生産額や所得水準、罹病率や人口動態などは、課題の重要な構成要素となるだろう。またそこでは、対象となる集団と個人は、概念上の前提として、あらかじめ明確に区分されている。

開発過程においてこのような数値により課題が構成されていく事態に対して足立明は、「資本主義的ハビタスの強要」とよんでいる [足立 1997: 3]。この「ハビタス」という言葉で足立が指摘しているのは、開発政策の内容それ自体というより、開発が開発として成立する前提にかかわる問題であり、地域や人々の生活がこの前提において語られ、定義されることを、足立は前景化しようとしたのだ。そしてさらに足立は、こうした前提は、開発政策に反対している NGO プロジェクトにおいても共有されており、対立しながら対立の土台を相互に確認していく共犯関係が、両者の間には存在すると指摘している [足立 1997: 2]。そしてその共通の土台を批判的に検討することにより、NGO も含めた開発政策や資本の運動を考えようとしたのだ。

ところで開発政策には、対象とされる地域や人々にかかわる他者表象が存在する。開発政策にかかわる言説は、数値化されたものだけではなく、開発しなければならない他者像を構成するのだ。またそれは、植民地主義における統治の問題でもあった。たとえば「未開」や「半開」といった言葉で行なわれた民族分類は、帝国日本の侵出の中でも登場した。こうした言葉は、支配され教導されるべき他者を構成し、帝国の開発政策や植民政策の正統性を調達したのである。したがって開発政策にかかわる言説を、エドワード・サイードのいう「オリエンタリズム」の中で理解する作業もまた、可能だろう。

ではこうした開発言説を、政策の対象として措定された人々は、どのように受け入れまた拒絶したのか。それは足立がいうように、日常の実践において開発言説がいかにか「内面化されるのか、また拒否されるのか」 [足立 1997: 2] という問題である。人々の日常世界を構成しそこでの実践に絡む言葉たちにおいて、開発言説がどのような意味を生み出すのかというこの問いは、政策レベルの正統性にかかわる用語の分析からすぐさま明らかになるものではない。しかし同時に、国家や帝国の繰り出す政策がもつ意味も、すぐさま日常的な実践に還元されるものでもない。とりえず世界は、公の政治とドメスティックな私的領域に区分されているのである。したがって「〈開発〉とオリエンタリズム」¹⁾という問いを立てた時に重要になるのは、

1) 本稿は、1994年に足立明によって行なわれたワークショップ「〈開発〉とオリエンタリズム」(1994年11月23日、京大会館)と、その報告書 [足立 1997] で展開された議論をふまえて執筆された。同ワークショップには、人類学、歴史学、経済学、政治学、社会学など多分野の研究者が参加し、長時間にわたって横断的議論が行なわれた。

国家や帝国の政治と、日常実践という言葉にかかわる両者の文脈を混同することなく、両者の絡まり、あるいは結節点に議論の焦点を当てることであり、また同時にこうした公と私という区分自体を問うことである。あえていえばそれは、公という政治ではなく、この区分を前提とし公を制定する政治の問題である。足立のいう、日常世界を解決しなければならない課題として構成する「資本主義的ハピタスの強要」もまた、こうした前提にかかわる問題であるだろう。すぐさま政治的意味を問うのではなく、何を政治といい何を日常と考えるのかという前提こそが、問われなければならないのだ。

いいかえれば「開発言説」を批判的に検討するということは、政策に登場する「未開」という言葉を「開化」といいかえるような問題でもなければ、他者の日常に抵抗の根拠や土着的価値を見いだすことでもないのだ。結論を先取りしていえばそれは、いかなる他者を描くのかという問いでもなければ、開発の内容にかかわる評価ということでもなく、開発を語り構成している言葉それ自体にかかわる問題であり、開発実践にかかわる言葉の在処の問題なのである。その言葉たちは、確かに公と私という区分を前提にしているのだが、同時にこの区分を横断し別の政治を生み出す潜在的な可能性も帯電している。その別の政治は、既存の公の政治でもなければドメスティックな領域に囲い込まれているわけでもない。表題にある「開発言説」を再考することとは、開発という領域を構成している言葉それ自体を問題にし、公と私の区分自体が問いにさらされるこうした可能性を検討する作業を意味しているのである。本稿ではこの検討作業を行なっていくための論点を、戦後日本の復興を念頭におきながら浮き上がらせることを目的とする。

2. 廃墟について

2.1 変わる可能性のある現在

足立の提示した問題を取り逃さないために、まず一切の現実が崩壊する壊滅的状態を想定してみよう。こうした設定が意外に響くとすれば、それは前述したように開発なるものがある種の予定調和的な未来を展望したものであり、一切が壊滅する事態を開発過程から排除しようとする力がそこでは働いているからだ、といえるかもしれない。壊滅的状態を過去や外部に囲い込むことにより、開発過程が見いだされるというわけだ。あえていえば、目の前に存在することを禁止され否認された壊滅的状態は、開発の前提なのだ。

だがここでは、前述したような開発が想定している解決しなければならない現実を、ある種の極限状態にまで引き戻して議論を立ててみたい。すなわち壊滅的状態とは開発の始まりにかかわると同時に開発の失敗でもあり、かかる状況を想定することは、あえていえば、開発過程において徹底的に回避され、否認され続ける廃墟を、開発の「ゼロ値」として設定することで

もあるだろう。²⁾

ところでこうした壊滅的状态に対しては、2つの見方が存在するといえる。まずは、くりかえしになるが、壊滅的状态を救済すべき対象としてみなす考えである。またそこには復興という名の開発の歴史が、開始されるだろう。前述したようにこの歴史では、救済すべき他者像とともに補填されるべき欠如が定量的に示され、日常生活はこうした数値において構成され、表現されることになる。廃墟にいる人々は欠如を抱えた救済されるべき人々であり、そこから始まる歴史は、定量的な欠如の補填として定義されることになるのだ。

この補填は、多くの場合国家的な主体における救済や復興の政策において遂行されるが、同時に欠如を商品需要に変え、崩壊状態を商品市場に変えていく事態でもある。こうした国家と資本による復興を、ナオミ・クラインなら「災害便乗型資本主義」(disaster capitalism)というかもしれない。そこでは国家とともに、一切の社会的なるものが商品化される事態として壊滅状態を包摂していく資本が、重要なアクターになる。またこうしたアクターを想定することにより、資本の増殖のための意図的な破壊が計画されることも了解できるだろう。ナオミ・クラインはこの計画を担う知の体系を、「ショック・ドクトリン」とよんでいる。廃墟は回避されるのではなく、復興の前提として計画されるのだ。逆にいえば復興の歴史において、計画された廃墟はいつも潜在的に準備されている [クライン 2011]。

ところで一切が崩壊した壊滅的状态は、これまでの連続的な主体を支え構成していた時空間自体の崩壊でもある。その中におかれた人々は、現実を一から再度構成するために言葉を探し求める。今起きていることがいかなる事態であり、なぜそうなったかを問い、どうすれば自らの現実を取り戻すことができるのか考えるのである。それは一切が崩壊した破局だが、すべてが可能性に開かれた状態であるともいえる。そこでは復興ということ自体も、前提にされてはいない。

廃墟とは、こうした可能性でもあると考えることもできるのだ。すなわちそれは、社会の崩壊を可能態としてみる考えである。一切が崩壊した状態は、何でもありうる未来に開かれた事態なのであり、レベッカ・ソルニットの言葉を借りればそれは、「変わる可能性のある現在 (a transformative present)」³⁾なのだ。そこでは緊急事態 (emergency) は解決されなければならない対象なのではなく、何かが現れ出る (emerge) 空間なのである [Solnit 2009: 10]。かかる見方からすれば、最初の救済や復興は、この可能性が消されていくプロセスであると、とりあえずはいえるかもしれない。崩壊した現実から新たに生まれる可能性を、喜びと団結とよぶソ

2) ド・マンにそくして修辞学的にいえばそれは、ゼロと名辞としてのゼロにかかわる問いの設定でもある [ド・マン 1994]。ド・マンは名辞としてのゼロをゼロの文彩とみなし、ゼロは現実には名辞がなく言葉がないとした。そのうえでかかる名辞でないゼロに一切が崩壊する「論議無用 (sans dispute)」の力を設定し、それが名辞としてのゼロに置き換えることによりその力が見失われるとする。

3) [Solnit 2009: 203]。同書の訳文については、基本的には [ソルニット 2010] に従った。

ルニットは、慈愛に満ちた救済の開始を次のように述べる。

与える者と求める者は二つの異なるグループとなり、受け取る権利があることをまず証明しろと要求する者から食べ物を与えられることには、喜びも団結も生まれない [Solnit 2009: 47].

壊滅的状态である廃墟は、復興という開発過程の出発点であると同時に、可能態としての現在なのである。こうした廃墟をめぐる両者の違いは、崩壊した現実における人間像にも現われている。前者の「ショック・ドクトリン」で想定されているのは、ショックのため一切の感覚がマヒし孤立した人間像であるが、ソルニットは廃墟の渦中で「人々は何をすべきか知っている」と断言するのだ [Solnit 2009: 10]。このソルニットの断言は何か。なぜ断言できるのか。それは次に述べるように、廃墟における言葉の在処にかかわる問いでもある。

2.2 「一に満たない、と同時に、二重である」

今述べた廃墟にかかわる2つの考えの位置関係を、最初にふれた「〈開発〉とオリエンタリズム」という問いとともに、もう少し検討しよう。

ホミ・K・バーバは、イギリス帝国のインド支配に言及しながら、一方で自由や民主主義という価値規範を掲げる国家が他方で帝国として他者を支配する際に、帝国自らが設定した普遍的に見える価値規範を植民地や植民地住民が満たしていないということが、専制的な統治を正当化する理由になっていると指摘する。そして、この「満たしていない」という状態を埋めていく教導というプロセスにおいて、植民地や植民地住民への政策が構想されるのだ。そこでは植民地主義は、その植民地と植民地住民に対して設定された欠如を満たしていく開発過程として、描かれているといってもよいだろう。

だがバーバは、この開発過程を成立させる根拠たる欠如を、「一に満たない、と同時に、二重である (less than one and double)」とも述べている。⁴⁾ すなわち、「満たない」ことが同時に別の世界の比喩でもあるということであり、そこには「一」である帝国の植民地主義の一挙的崩壊に対する不安が、すでに醸成されている。逆にいえば、すでに常態として存在する崩壊の危機は、まだ「満たない」という事態に無理に置き換えられることによって、不断に回避されているのだ。バーバによれば、学知も含め帝国が作成したあらゆる文書はこの置き換えにかかわっているのであり、そこではしばしば「満たない」ということが、計算可能 (calculable) な量的理解において描かれているのである [Bhabha 1994: 99].

この欠如をめぐる無理な置き換えにおいては、いくつかの点を指摘しておく必要がある。まずそこには事後性を帯びた認知がある。すなわち「一に満たない、と同時に、二重である」と

4) [Bhabha 1994: 97]. 訳文は [バーバ 2005] に従ったが、一部訳し変えたところもある。

いう事態は、「一に満たない」と思っていたことが、別の相貌を帯び出すことであり、あえていえば事後的に気がつくことなのだ。バーバは無理な置き換えを担う言葉や文書を「遅延の文法 (a syntax of deferral)」[Bhabha 1994: 95] とよび、そこではこの「二重である」ことに気づくことを先延ばしにし続ける、言語的秩序が含意されている。

そして第二に、こうした「遅延の文法」は、同時に不安の文法でもあるということだ。すなわちそれは、自らの見立てが崩壊するかもしれないという統治者の不安でもあり、バーバはこの不安を、「ナルシスティックな権威の裏側には権力のパラノイアがある」と述べている [Bhabha 1994: 100]。逆にいえば、この不安を押し隠さんとする保身の身ぶりにおいてこそ、救済し教導しなければならない他者にかかわる言語化がなされるのだ。ここに「開発言説」は、生まれることになるだろう。

そして第三に重要になるのは、この欠如が二重になる事態と、その二重化を担う言葉の在処である。それは、すでに言語的秩序に捕獲されている欠如が、「遅延の文法」と保身の身ぶりに抗いながら別の相貌をもって登場することにかかわる言葉の問題といってもよい。すなわち欠如はまずは過去の出発点として事実化され、そこを名辞的なゼロ値にして、まだ「満たない」部分が定量的に語られる。だが他方で置き換えられ押し隠された欠如が、この「遅延の文法」の背後に憑くことになる。

「満たない」ということを成り立たせる欠如が、明確な事実として語られるのに対し、この背後に憑いた欠如は、ただ徴候的にしかとりあえずは察知できない。したがって欠如の二重性は、二種類の欠如が並置されているということではなく、開発過程を成り立たせる言語的秩序の機能不全であり、かかる言葉の停止をともないながら新たに始まる言語化なのである。いいかえれば、ナオミ・クラインの廃墟における人間像とソルニットの人間像の2つの類型が、事実の問題として並列的に存在している訳ではなく、前者に対して後者は徴候的であり、またその登場は、言語秩序の融解とシニフィアンの連続性に切断をもたらす事態なのだ。⁵⁾

この、欠如の相貌が変態することと既存の言語的秩序の融解と切断が重なるという論点は、⁶⁾先ほども述べたソルニットの、「人々は何をすべきか知っている」という断言にもかかわる。ナオミ・クラインの災害便乗型資本主義にかかわる言説が「ショック・ドクトリン」という学

5) フェリックス・ガタリは起源(名辞的ゼロ)から始まる歴史をシニフィアンの連鎖とよび、その切断(coupure)を「革命的歴史」とよぶ [ガタリ 1994: 281]。そして「歴史学とはシニフィアンの切断の波及効果を研究することであり、いっさいがひっくり返る瞬間を把握することである」と述べている [ガタリ 1994: 282]。ガタリにとってこのシニフィアンの連鎖は、言語的秩序に主体が従属していることであり、また切断とは、主体がこの言語的秩序とともに別物に変態していくこととしてある。すなわちそれは、「打ったはずの文字と全く別の文字をよむことになるようなもの」 [ガタリ 1994: 281] に他ならない。

6) それはソルニットが、既存の秩序が形を失い消尽する不確かな領域を「閾 (liminality)」とよぶことにもかかわる [Solnit 2009: 47]。この閾の領域は時空間の崩壊でもある。すなわち、これから何がおきるかわからない。と同時に、すでに何がおきていたのがわからないのだ。そしてその秩序の消尽には、事態を語る言語的秩序も含まれるのだ。秩序の閾は言葉の閾でもある。

知の集積であるのに対して、ソルニットの「変わる可能性のある現在」にかかわる言葉は、散乱的であり多重的である。たとえば災害を何かが変わる事態であると感知しそこに喜びが生まれたとしても、ソルニットは、「わたしたちの言語には、こういった感情を表わす語彙すらない」と述べているのだが、他方でソルニットは、廃墟の光景をまるで見てきたかのように生き生きと描き出すのだ。⁷⁾

それは、知っているが言葉では表すことができず、そこにあるとしかいいようのない記述である。まただからこそ、「ある」と断言するしかないのだ。そしてこの断言は、「遅延の文法」が刻む時間とそこに隠された「パラノイア的不安」を、一気に飛び越えようとする飛躍でもあるのだろう。またこの断言と飛躍こそ、足立のいう、「開発言説」がいかに「内面化されるのか、また拒否されるのか」という問題でもある。

3. 戦 後 復 興

3.1 戦後の始まり

次に、上記のような廃墟にかかわる欠如の二重性と言葉の在処を念頭におきながら、日本の戦後における復興ということを検討し、この二重性がもたらす政治とは何かということを考えたい。繰り返すが、開発と同様に復興は廃墟を埋めることのできる欠如に置き換えていくプロセスでもあった。だが、その置き換えの手前が存在するのである。まず壊滅的状态が言語化される瞬間に目を凝らし、そこから議論を立ててみたい。

「パット剥トッテシマッタ アトノセカイ。」広島で被爆し、戦後が始まろうとする1951年に自死した原民喜は、原爆投下直後の状況を1947年に発表された『夏の花』で、原爆によりもたらされた廃墟をこのように表現した。この原民喜の一文に対して直野章子は、「言葉とその意味との関係が崩れてしまったのかもしれない」[直野2004: 11]という注釈を加えている。すなわち直野の指摘は、言葉と言葉が指示する対象との関係が壊れたということであり、したがってそれは、言葉は何かを指示することなく漂い、指示されるべき存在は、言葉との関係を喪失したまま、ただモノとしてたたずんでいる事態なのだ。直野はそれを、「モノとしての死」と述べている。⁸⁾

この原民喜の言葉で示されているのは、悲しむべき対象としての廃墟の悲惨さでもなければ、解決すべき課題ということでもなく、あえていえばそうした悲惨さということさえ剥脱された状態、悲しむことさえ不可能な状態である。直野のいう「モノとしての死」は、かかる剥

7) たとえば次のような記述がある。「家を失った人々のテントや、ドアやシャッターや屋根材に間に合わせて作った変てこな仮設キッチンが町のあらゆる場所に出現すると、陽気な気分が広がった。月に照らされたあの長い夜には、ギターやマンドリンの爪弾きがどのテントからか漂ってきた」[Solnit 2009: 15].

8) [直野2004: 21]. 直野の同書をめぐっては、[富山2008]を参照されたい。

奪を意味している。そして人々は、意味を失ったモノたちの中にいた。廃墟にかかわる言葉は、そこから開始されるのだ。この原爆による壊滅的状态が言語化される瞬間を、いま戦後復興の始まりとして確保しておきたい。

また直野の試みがそうであるように、こうした廃墟の言語化の始まりは、事実としてあるということよりも、戦後という時間への問いとしてある。⁹⁾ 廃墟が新しい都市に生まれ変わり、原爆ドームが唯一の被爆国を示すモニュメントになり、原子力の平和利用という名の核開発が開始される中で、廃墟は戦後の出発点として過去化されていく。そしてこのプロセスこそ、戦後復興に他ならない。そこでは、「パット剥トッテシマッタ アトノセカイ」であるにもかかわらず、多くの人々が廃墟の悲惨さを語り、平和を唱えるのだ。だがこの戦後復興には、言葉の外に追いやられていったもうひとつの廃墟が張り憑いているだろう。直野のいう「モノとしての死」は、復興という戦後への現実批判としての廃墟でもあるだろう。

繰り返すが、このもうひとつの廃墟とは、悲惨な情景ということではない。あえていえばモノたちが、これまでの言葉の呪縛から解放され、新たな意味を担おうとする複数の始まりとして登場したということでもあるのだ。またそこには、これまでの言葉の秩序への内省や批判も含まれるだろう。かかる廃墟には、ある種の解放が間違いなくあるのではないか。たとえば、自らの経験を想起しながら西川祐子は、敗戦直後の焼け跡を次のように述べている。

敗戦後の焼け跡に行き交った言説には、それぞれの言葉に指示物があるという新鮮な発見があった。戦時中に流通していたひどく観念的な四字熟語の氾濫にくらべて、頭の中が明るくなるような言葉の解放があった [西川 2006: xiii]。

「国体護持」や「八紘一宇」といった四字熟語により構成されていた現実が崩壊し、言葉と物が新しい関係を結ぼうとしているのだ。かかる意味で壊滅的状态は、これまで連続していた言葉の切断でもあるのだ。と同時にその切断は、壊滅的状态に言葉がにじりよる瞬間でもある。西川が「言葉の解放」といったのは、この瞬間を担う言葉たちのことなのだろう。そこでは言葉が現実になり、現実が言葉になる。だがその解放は長くは続かない。西川は続けて、「そのような期間はながくはつづかず、まもなく平和という遠隔シンボルが行き交う。さらに言葉が指示物からしだいに遠くなり、記号だけで世界が構築され、記号に思考が動員される」ようになると述べている [西川 2006: xiii]。「国体護持」から「平和」へ。それは、文字どお

9) [直野 2004] で取り上げられている「原爆の絵」は、1974年と翌年の75年、NHK広島放送局の呼びかけで集められたものである。「広島市とその周辺での被爆後の状況をあらわす絵」の募集がなされ、2,200枚もの絵が集まった。それから30年余り経た後、直野さんは、絵とともに絵の作者を訪れた。この『「原爆の絵」と出会う』は、直野さんと、絵の作者、そして絵という三者の出会いにおいて構成されているといえる。

り戦後の始まりであり、焼け跡が復興に向かうプロセスでもあるだろう。また焼け跡に解放を見据える西川においては、壊滅的状态が言語化される瞬間と復興を担う言説が明確に峻別されている。先取りしていえば、この接近戦的な峻別こそ、重要でかつ最も困難な問いでもあるのだ。

この峻別は、戦争責任という問題でもある。西川が念頭においているのは、上野千鶴子の次のような文章である。上野は戦後女性の平和運動を取り上げて次のようにいう。

戦争から平和への動員目標の転換が、どのような反省の自覚のもとになされたのか、それはそもそも「転換」と言えるものであったのかどうか… [上野千鶴子 2006: 159].

「反省と自覚」という戦争責任と「言葉の解放」については次に検討するが、付言すれば、ここで転換かどうかということが問題なのではない。四字熟語から連続してしまう戦後という時間に、壊滅的状态が言語化される瞬間を挟み込み、戦後復興とは別の時空間を想像してみたのである。西川のいう焼け跡では、四字熟語の戦前も、前に進むべき「平和」な戦後復興も同時に拒否されている。この拒否が言葉を獲得する時、西川はそれを解放といったのだ。かかる言葉の在処を戦後復興に確保することにより浮き上がる復興とは何か、それはまさしく足立の提出した、「開発言説」をめぐる「内面化されるのか、また拒否されるのか」という問いと重なるだろう。

3.2 お守りの言葉

こうした西川の「言葉の解放」を考えるために、本稿では、戦後直後に「思想の科学研究会」を立ちあげた鶴見俊輔の戦後にかかわる文章を参照し、議論を進めたい。なぜなら、結論を先取りするというならば、鶴見の戦後の始まりにかかわる思考においては、廃墟が言語化される瞬間が見据えられており、あえていえば「遅延の文法」に対していかに言葉を対峙させていくのかという問いが、そこには一貫して存在するからである。

まずは、「言葉のお守りの使用法について」という文章から検討を始めたい。この文章は、1946年に創刊されたばかりの『思想の科学』（1946年5月）に掲載されたものであるが、文章自体は1945年に書かれており、文字どおり廃墟の中で生まれたものだ。この時鶴見は、24歳である。

この「言葉のお守りの使用法」で鶴見が批判しようとしたのは、西川と同様に、「国体」や「日本的」、あるいは「皇道」といった一連の言葉だ。

「国体」「日本的」「皇道」などの一連の言葉は、お守りとおなじように、これさえ身につけておけば自分に害をくわえようとする人々から自分を守ることができるし、この社会で自分

にふりかかりやすい災難からまぬかれることができるという安心感を、この言葉をつかう人々に与えた [鶴見 1967: 38]

鶴見は廢墟を前にして、これまでの世界を構成していた言葉が、その言葉が指示する言語的な意味内容ではなく、個々の私的な日常の中で「自分を守る」ために運用されてきたと指摘しているのである。こうした戦前・戦中の理解は、鶴見においてはその後の一貫して存在している。たとえばその後の『戦時期日本の精神史』（1982年）においても、軍人勅諭や教育勅語に登場する言葉を「カギ言葉」とよび、それを自らの地位を守るための「定期券」だと述べている [鶴見 1982: 50-51]。¹⁰⁾ そこでは、言葉を使う主体が、言葉が示す公的な意味内容や国家的価値規範を受容するというのではなく、自らの利害の保護を目的としているという、言葉の遂行的な意味が看取されている。またこうした「お守り言葉」では、言葉の生産を独占する公の政治と、その言葉を「自分を守る」ために運用する私的領域が、想定されている。いいかえればこの「お守り言葉」において、公の政治と私的領域が浮かび上がるのだ。

ところで、この「言葉のお守りの使用法」を鶴見が発表した同年である1946年、丸山真男は『世界』（1946年3月）に「超国家主義者の論理と心理」を発表した。この文章で戦後知識人としての華々しいデビューを飾る丸山も、鶴見と同様に「国体」を検討し、そこに「国家的なるものの内部へ、私的利害が無制限に侵入する」構造を指摘したのである [丸山 1964: 16]。確かに私的利害が、公であるはずの国家と癒着する事態という点においては、丸山は鶴見の考えと重なっているといえるだろう。しかし丸山がカール・シュミットの「中性国家」を範型にして国体を国家論として論じるのに対し、鶴見はあくまでも私的利害を構成する言葉の問題として、それを考えようとした。そしてこの違いは、1945年という出来事をどこでとらえるのかということにおいて両者が決定的に異なっているということとも関係する。たとえば丸山は「超国家主義者の論理と心理」の末尾で、次のように述べる。

日本軍国主義に終止符が打たれた八・一五の日はまた同時に、超国家主義の全体系の基盤たる国体はその絶対性を喪失し今や自由なる主体となつた日本国民にその運命を委ねた日でもあつたのである [丸山 1964: 28]

この丸山の文章に、「自由なる主体」を啓蒙する戦後知識人の開始をみることができるだろう。国家の崩壊はすぐさま終止符であり、あえていえば日本国民が自由になり戦後を歩み出す運命の日だったのだ。だが鶴見にとっては違う。1946年という同時期に鶴見は、戦後の始ま

10) この鶴見の戦時期に対する言葉の検討については、[富山 2006a] を参照。またこうした「お守り言葉」や「カギ言葉」の理解は、鶴見の転向論とも密接に関係している。

りを次のように述べている。

政府は、戦中から戦後にかけて、同じ系列のお守り言葉をつかってみずからの政策を正当化し、その言葉の指し示す内容を敗戦の危機に際してすりかえたのであった [鶴見 1967: 41]。

丸山が戦後啓蒙を担う知識人として自由を提唱した時に、鶴見は、「国体」「日本的」「皇道」などの一連の言葉と同じ系列の中に、「自由」や「平和」あるいは「民主」が登場するようになる」と述べているのである。そこで批判されているのは、「これまでのお守りの言葉の体系をのこしておいて政治をやっぺいこうとする」戦後であり [鶴見 1967: 56]、こうした鶴見の認識においては、戦後とは「お守り言葉の体系」の中に「アメリカから輸入された『民主』『自由』『デモクラシー』などの別系列の言葉がお守り言葉としてさかんに使われるように」なる事態であり [鶴見 1967: 42]、さらにこの「アメリカ系列」以外にも、「ソヴィエト系列」が入り込んできたとされている [鶴見 1967: 45]。あえていえば戦後復興とは個々の言葉の意味内容ではなく、この「お守り言葉」という「体系」において展開したのであり、この「体系」こそ、バーバのいう「遅延の文法」であるといえるだろう。

そして、眼前に広がる廃墟を前にして進行するこの「体系」の衣替えは、同時に復興の中で廃墟が隠されていくプロセスでもあった。なぜ破局になったのかという内省的問いが、いかに復興するのかという未来計画に置き換えられていったのである。また「開発言説」の内面化という問いを立てた足立にそくしていえば、その内面化とは個々の言説を受容するというのではなく、廃墟を名辭的ゼロとして受け入れ、それを復興の出発点にすることに他ならない。そしてだからこそ、西川のいう「言葉の解放」、いかえれば廃墟をすぐさま復興に結び付けるのではなく、廃墟を廃墟として抱え込むということにかかわる言葉の在処が問われることになる。それは言葉とモノとの関係が崩壊した廃墟から始まる言葉を確保することであり、したがってその言葉たちは、指示物が定まらない濫喩的な連結をおこすことになるだろう。

3.3 戦争体験と戦争責任

廃墟とは言葉の崩壊であり、説明のつかないモノの世界を抱え込むことであった。繰り返すがそれは解放でもあったが、同時に言葉を求め言語化を希求することでもあった。そして鶴見にとって、戦後に抗して廃墟にかかわる言葉を確保する作業は、重なり合う2つの問題として遂行されたといえる。ひとつは戦争体験と戦争責任をめぐる、今ひとつはサークル運動をめぐるである。前者から考えよう。

鶴見は戦争責任という問いを、この廃墟にかかわる言葉を希求する営みとしてとらえようとした。すなわち法制度的に定義された法廷を前提にした行為の司法的判断ではなく、廃墟の言語化こそ、「言葉の体系をのこしておいて政治」を再開することへの抵抗なのであり、こうし

た再開への抵抗として戦争責任を設定したのである。そしてこの言語化において重要になるのが、戦争体験である。鶴見は、1963年に雑誌『思想』（1963年1月）に発表した「サークルと学問」において、次のように述べている。

戦争体験は、たしかに、現代日本人の生活の「底」の一種である。とくに1945年8月15日、敗戦を終戦とよんですりぬけてとおろうとしたところから、戦争体験の上に手ばやく布をかぶせてそれを底辺化してしまった〔鶴見1967:136〕。

鶴見にとって戦争体験は、過去の出来事にかかわることではなく、戦後の「現代」における「底」なのだ。またここで「すりぬけてとおろうとする」と鶴見が述べていることこそが、戦後復興に他ならない。あえていえば戦争体験とは、戦後復興という時間の中で消されていった痕跡といえるかもしれない。

そしてそこには、明らかに2つの時間性が想定されている。ひとつは復興の時間、今ひとつは戦争体験において確保されている「底」である。この「底」という言葉は後段で述べるサークル運動の中で再度議論しなければならないが、あらかじめ付言しておけば、それは体験者である当事者こそが語ることでできる事実ということではない。あえていえば過去を想起することにより、今を作り変えようとする営みの総体なのだ。

また鶴見は、1956年に雑誌『中央公論』（1956年1月）に発表した「知識人の戦争責任」において、廃墟を前にして湧きあがった「うらぎられた」という感情を、戦争責任を考える際の戦争体験として重視している〔鶴見1991:126-127〕。¹¹⁾この「うらぎられた」には、後悔という感情が含まれており、なぜ破局に至ったのかという過去、さらには「すりぬけてとおろう」としてきた戦後という時間への内省的問いがあるだろう。あるいはそれは、継続する「お守り言葉の体系」への決定的な違和といってもよいだろう。ここでもやはり、あくまで今が問題なのだ。

鶴見にとって戦争責任とは、「お守り言葉の体系」において展開する、戦前から継続する政治への問いとしてあった。そしてその責任とは、個人やさまざまな集団が、戦争体験を言語化しそれを内省的に考える営みのプロセスとして想定されている〔鶴見1991:131〕。あえていえば法廷といった制度的判断ではなく、遂行的な言語行為としての責任である。そしてこうした鶴見の戦争体験と戦争責任の設定は、廃墟という埋めようのない欠如を、復興の出発点に据えるのではなく、抱え込む営みでもあったといえるだろう。

11) この「うらぎられた」という感情については、たとえば吉見義明も指摘している。そこで吉見はこの感情が、戦争協力を前提にした「戦争協力についての悔恨」として検討している〔吉見1992〕。またこの点については、〔富山2006a〕の第二章を参照。

この欠如を抱え込むことについて、たとえばジュディス・バトラーはフロイトのメランコリーを再検討する中で、欠如を喪失としてではなく、「喪失を究極的に名づけえないものとして温存する」こととして欠如の「体内化 (incorporation)」という議論を展開させている [バトラー 1999: 129-132]。この「体内化」は、欠如を何かに置き換え換喩的に表現することではなく、あるかないかという問い自身を停止させ、喪失を抱え込んだメランコリックな言語空間を生み出すことを意味している。重要なのは欠如を嘆くことでも補填することでもなく、抱え込むことなのだ。

またバトラーにとってこうした「体内化」は、欠如を基盤として立ち上がる主体への根源的な批判、あるいは攪乱の可能性としてある。すなわち主体が、主体の前に存在している欠如を自らの基盤として「語るができるというだけではなく、語らなければならないメタヒストリーとして機能」[バトラー 1999: 129] させる法 (父の法¹²⁾) により制定されるのに対して、「体内化」は、「名づけえないものとして温存する」のだ [バトラー 1999: 130]。そしてこの「温存する」とは、「名づけえないもの」という解説的名辞をあたえることではない。それは言葉を希求する営みであり、そこでの言葉は、濫喩的に連なり、主体の基盤を攪乱させ、欠如を基盤としない「わたしたち」を生み出していくことになる。¹³⁾

復興を受け入れることは、このバトラーのいう法を受け入れることであり、それは戦後という時間において想定される主体 (日本) にかかわることだといえる。そしてこの法に抗うことは、欠如にかかわる別の言葉と集団性を希求することに他ならない。鶴見の戦争責任とは、かかる希求としてあるのだ。鶴見は廃墟を抱え込んでいくプロセスにおいて、継続する「言葉のお守り的使用法の体系」を問い、この言葉において維持され守られてきた公と私的領域の区分のあり方を問い、復興とは異なる集団性を生み出す端緒を確保しようとしたのだ。戦争体験の言語化とは、かかる集団性への端緒を確保する作業としてある。

そして鶴見は、戦争体験の言語化に言及し、「これがないあいだは、日本の再建は、しないほうがよい」と述べ、「これをしないで日本を再建してしまったら、ひどいことになると思う。今の再建は、それだ」と続ける [鶴見 1991: 131]。くりかえすが再建など「しないほうがよい」と鶴見が述べた時点では、すでに戦後復興という「再建」は開始されているのであり、したがって希求される言葉は、すでに現前に広がっている復興から徴候的に察知され、その言葉とともに生まれる集団性は、それまでの言語的秩序の融解と切断をともなう断言として登場するだろう。それは、次に述べるサークルにかかわる言葉の問題でもある。

12) かかる法は、バトラーにおいては女を欠如の位置に据え置く制度でもあり、父の法でもある。またそれは、現実界を前提にした象徴的な言語秩序でもあり、したがってメランコリーからバトラーが展開した「体内化」は、女が語るという問題でもある。

13) バトラーの議論をふまえ、基盤をもたず行為遂行的に生成する私たちを、「困難な私たち」として議論したことがある [富山 2000]。

3.4 サークル

サークルという言葉が文化運動の集団として登場したのは、蔵原惟人が日本無産者芸術連盟の機関誌でこの言葉を紹介したのが最初だといわれている [鶴見 1991: 94]。その後、1950年代には、職場や学校あるいは地域において多くのサークルが生まれた。ここではパンフレットや文集など多くの媒体が生み出された。こうしたサークル運動を思想史として位置づけようとする試みについては、すでに多くの研究があるが [現代思想編集部 2007; 鳥羽 2010; 新木 2011; ギンダレ研究会 2010]、こうした中であって鶴見のサークルへの着目は、先駆的な位置にあるといえる [鶴見 1976]。ここでは、これまで述べてきた戦後復興と戦争体験に対する鶴見の考えが、どのような形でサークルへの着目に繋がったのかということを検討したい。

すでに述べたように、鶴見にとって戦争体験も戦争責任も集団性にかかわる問題であった。そしてこの集団性の問題こそ、鶴見のサークルへの着目に繋がっている。たとえば戦争体験を「底」とよんだ先に引用した文章は、1947年4月に長野県で創刊された『山脈』という雑誌と「山脈の会」というサークルにかかわって書かれたものである。このサークルでは、「底辺体験」を語り、書くという作業をつづけてきたが、その中でも戦争体験が一貫して「底辺体験」の軸であった。そして鶴見は、この「山脈の会」をはじめとするサークル運動を、「みずからの過去への記憶から規範を作り出す」作業とみなし、それを「集団的思考」と述べている [鶴見 1967: 142]。「お守り言葉」において維持されるドメスティックな領域ではなく、別の集団性を生み出す作業は、戦争体験をめぐる言葉を作り上げる作業としてあり、それは鶴見にとっては、やはり廃墟の言語化だった。

この廃墟の言語化と集団の生成については、少し注意深く議論する必要がある。なぜならそれは、欠如を抱え込むという「体内化」にかかわる言葉の問題でもあり、またさらに研究なる行為にかかわる問いでもあるからだ。こうしたことを考える際、鶴見がサークルを担う「大衆」について、「それ自身の虚構性を持ち、仮面をまとっている」と述べている点は [鶴見 1976: 11]、決定的に重要である。すなわち鶴見は、人々の語りには「虚構性」が張り憑いているというのだ。

かかる「虚構性」から考えれば、サークルの集団性は、事実として確認される体験や実態を基盤に構成されているのではなく、あえていえば、ありえたかもしれない、あるいはありえるかもしれないというとりあえずは虚構の関係にかかわるといえるのではないだろうか。さらに鶴見はこの集団性が生成するプロセスについて、「サークルの進行途上で自我のくみかえ」が起きていると述べている [鶴見 1976: 8]。すなわちサークル運動においては個の変容と集団の生成が同時に進行するのであり、その変容と生成を担う言葉が「虚構性」を帯びるというのである。ありえたかもしれない、ありえるかもしれない関係性を言葉にし、それが個の変容と集団の生成のプロセスを担うのだ。

廃墟を補填し回復しなければならない欠如として設定し、「お守り言葉の体系」とともに戦後復興が展開する中で、鶴見が見出そうとしたのは、廃墟から別の集団性が生成する可能性であった。鶴見にとってサークルとは、こうした可能性の問題だったのである。かかる鶴見のサークルへの認識について、いくつかの論点を確認しておきたい。

まず、そこにかかわる言葉が「虚構性」を帯びるという点である。すなわち確認しておかなければならないのは、戦後復興を構成する「お守り言葉」に対して、現実にそくした言葉を対峙させているのではないということだ。そしてこのことと関連して第二に指摘すべきは、虚構対現実の争いではなく、いかなる集団性を作り上げるのかという点こそが、サークルにおいて重要だという点である。すなわち、戦後復興とサークルの決定的な分岐は、「お守り言葉」においては国家と私的領域が前提として区分されているのに対して、サークルの集団性では「自我のくみかえ」がおきるのであり、個の変容と集団の生成が重なり合いながら展開するのだ。またそのプロセスは、廃墟を抱え込むことにより確保されている。

それはあえていえば、バトラーがいうような父の法を拒絶する欠如の「体内化」であり、またサークル運動における言葉の「虚構性」が担うのは、「お守り言葉」によって「自分を守る」というような公と私的領域の区分において描かれる保身的な主観的世界ではなく、「個人とか夫婦家族に依拠しない新しい形態の主観性」[ガタリ 1994: 499]の創出なのかもしれない。¹⁴⁾

おわりに一研究するということ

最後に、「開発言説」を再考するということが、すなわち開発を構成している言葉それ自体を批判的に検討するということが、鶴見が見出したサークルと研究の関係を考えながら述べておきたい。そこでも論点は、やはりこの言葉の「虚構性」にあるだろう。たとえばサークルに戦後復興と異なる現実があることを事実確認的に記述しようとする研究者は、この「虚構性」に躓くことになるだろう。あるいは、サークルで言語化される戦争体験は、本当にあった体験なのか。もし事実を確認しその嘘を暴くことが研究というのなら、戦後復興という現実には揺らぐことなく追認されるだろう。

そしてサークル運動を記述する者が行なう作業が、その嘘を暴くことではないとするならば、そこで生成する集団性について論じたり記述したりする研究は、いかなる行為なのか。それは文字どおり他者を実態的に想定しようとする人類学的フィールドワークにかかわる問題で

14) 上野俊哉は、鶴見の思想も含め、花田清輝、きだみのる、安部公房らの「思想の不良たち」の思想を、フェリックス・ガタリのいう「言表行為の集団的組み合い (collective arrangement of enunciation)」として検討している [上野俊哉 2013]。この上野の議論は、極めて重要である。そこでは既存の個と集団ではなく、機械状の集団性 (ガタリにそくしていえば主体集団) を担う思想とは何かという問いが、正面に据えられている。そしてこうした集団の生成が既存の公である制度といかなる抗争を展開するのかということが、次に最大の論点になるのだ。

あるともいえるが、本稿にそくしていえば、前述したソルニットの「変わる可能性のある現在」にかかわる言葉が、断言的でありかつ散乱的であることにかかわる。「なぜサークルを研究するのか」という問いの中で、鶴見は、15年間の研究活動をふりかえりながら、次のように述べている。

サークルそのものが書くという方法をかならずしも必要としないものとしてあり、それに共感を持つ私たちとしては、なるべく、書くことに食われない姿勢を保つことを必要と感じてきた。だから、書くということでは成果は小さいけれども、この15年間にさまざまな状況に出会って、自分たちの感覚を延長し拡大するという機会には恵まれた。そのことがいくらかは、書くことの上に影響をもっているものと望みたい [鶴見 1976: 20].

ここで鶴見が述べているのは、事実を明らかにすることでもなければ、真偽をめぐる判断でもなく、研究する者が、「書くことを必ずしも必要としない」ということに「共感」しながら、「自分たちの感覚を延長し拡大する」ようなサークルの研究だ。かかる研究行為とは一体何か。鶴見はそこで、サークルを研究するサークルという問いを設定する。¹⁵⁾すなわち研究において語られる言葉もまた、「研究対象の性格を分かち持って」いるのである [鶴見 1976: 20]。そしてこの設定は、すぐさま研究もまた「虚構性」を帯びているということでもあり、同時に、研究行為の中で研究者自身の「自我のくみかえ」と研究集団の生成が展開するということの意味しているだろう。あえていえば、研究行為も集団生成の一端を担っているのである。¹⁶⁾

廃墟を補填することなく抱え込み、復興とは異なる社会を構成していく可能性を思考することが研究であるならば、研究行為自体がこうした言語の「虚構性」を抱え込みながら遂行的に集団を構成していく作業なのではないか。それは虚構を事実として記述することでも、虚構を虚構として論じることでもない。あえていえば文章化された研究内容が問題なのではなく、研究するという行為においていかなる関係が構成されていくのかということが問題なのだ。研究内容もこの関係性において意味をもつ。¹⁷⁾

したがって「開発言説」を再考する作業は、言葉をピックアップして解釈を加える作業ではない。足立が的確に述べたように、そうした「文芸批評家的な言説分析」[足立 1997: 2]で

15) 鶴見を中心とした「思想の科学研究会」はサークルを研究するサークルとして、1963年1月に「集団の会」を作る。その活動については、[思想の科学研究会 1978].

16) たとえば鶴見は、こうした研究のあり方を、大学を軸に制度化された学知に対して、「つつみこみ学風」と述べている [鶴見 1967: 127-131]。こうした鶴見の学知の議論は、文字どおり大学批判、アカデミズム批判としてもある。[富山 2006b] を参照。

17) 上野は的確にも、鶴見の思想を、「つながりを見いだす」というより「つながりを作る」思考であると述べている [上野俊哉 2013: 66].

はだめなのだ。他方でそれは、さまざまな個別事例をピックアップし、その囲い込まれた経験において政策言説を批判するような事実確認的な民族誌記述とも違う。政策言説は「お守り言葉」として日常に内在化しているものであり、そのリアリティを嘘だと暴くことではなく、その闊の領域にかかわる言葉において別のリアリティを生み出すことこそが必要なのだ。あえていえば虚構に対して記述者がともいかなるリアリティを作り上げるのかということが、研究という行為に問われているのであり、かかる意味において集団性は、研究することにおいて拡大するのである。開発過程が基底に押し隠した廃墟から始まるべきは、かかる作業なのかもしれない。

そして、広島と長崎の廃墟を補填するように始まったこの国の原子力の「平和利用」が、またしても廃墟に帰結した今、足立さんは何を考えているのだろうか。エラそうな物言いに対してはいつも、「インチキだ」と押し返す足立さんは、インチキが露呈し、にもかかわらずまたしても「お守りの言葉」とともに復興が推し進められようとしているこの国の壊滅的状况の中で、どのような研究サークルを構想していたのだろうか。

引用文献

- 足立 明. 1997. 「冒頭発言 1」足立明編『「開発」とオリエンタリズム』（「総合的地域研究」成果報告シリーズ No. 28）, 2-3.
- 新木安利. 2011. 『サークル村の地場』海鳴社.
- Bhabha, Homi K. 1994. *The Location of Culture*. London & New York: Routledge.
- バーバ, ホミ・K. 2005. 『文化の場所—ポストコロニアリズムの位相』本橋哲也・正木恒夫・外岡尚美・阪本留美子訳, 法政大学出版局.
- バトラー, ジュディス. 1999. 『ジェンダー・トラブル』竹村和子訳, 岩波書店.
- ド・マン, ポール. 1994. 「パスカルの説得の寓意」ステイーブン・J・グリーンブラット編『寓意と表象・再現』船倉正憲訳, 法政大学出版局, 13-46.
- ガタリ, フェリックス. 1994. 『精神分析と横断性—制度分析の試み』杉村昌昭・毬藻充訳, 法政大学出版局.
- 現代思想編集部. 2007. 『現代思想臨時増刊 戦後民衆精神史』青土社.
- クライン, ナオミ. 2011. 『ショックドクトリン 上, 下』幾島幸子・村上由美子訳, 岩波書店.
- 丸山真男. 1964. 『増補版 現代政治の思想と行動』未来社.
- 直野章子. 2004. 『「原爆の絵」と出会う』岩波書店.
- 西川祐子. 2006. 「戦後という地政学」西川祐子編『戦後という地政学』東京大学出版会, v-xiv.
- 思想の科学研究会. 1978. 『共同研究 集団』平凡社.
- Solnit, Rebecca. 2009. *A Paradise Built in Hell*. New York: Penguin Group.
- ソルニット, レベッカ. 2010. 『災害ユートピア—なぜそのとき特別な共同体が立ち上がるのか』高月園子訳, 亜紀書房.
- 鳥羽耕史. 2010. 『1950年代』河出書房新社.
- 富山一郎. 2000. 「困難な『わたしたち』」『思想』913: 91-107.

- _____. 2006a. 『増補 戦場の記憶』日本経済評論社.
- _____. 2006b. 「接続せよ！研究機械」『IMPACTION』153: 10-21.
- _____. 2008. 「特集『「原爆の絵」と出会う』をめぐって」『日本学報』（大阪大学日本学研究室）27: 1-18.
- 鶴見俊輔. 1967. 『日常的思想の可能性』筑摩書房.
- _____. 1976. 「なぜサークルを研究するか」思想の科学研究会『共同研究 集団』平凡社, 3-21.
- _____. 1982. 『戦時期日本の精神史』岩波書店.
- _____. 1991. 『方法としてのアナキズム』鶴見俊輔集 9, 筑摩書房.
- 上野千鶴子. 2006. 「戦後女性運動の地政学」西川祐子編『戦後という地政学』東京大学出版会, 137-180.
- 上野俊哉. 2013. 『思想の不良たち』岩波書店.
- 吉見義明. 1992. 「占領期日本の民衆意識」『思想』811: 73-99.
- ザンダレ研究会. 2010. 『「在日」と 50 年代文化運動』人文書院.